大学におけるピアサポート活動の推進
～富山大学の 12 年間の取り組みを振り返って～

富山大学　学生支援センター アクセシビリティ・コミュニケーション支援室
日下部貴史

Promotion of peer support activities at universities
- Looking Back on 12 Years of Initiatives at the University of Toyama

Accessibility and Communication Support Office, Student Support Center, University of Toyama
Takashi Kusakabe

富山大学保健管理センター紀要第21号 23p～30p 別刷

大学におけるピアサポート活動の推進
～富山大学の 12 年間の取り組みを振り返って～

富山大学　学生支援センター アクセシビリティ・コミュニケーション支援室
日下部貴史

Promotion of peer support activities at universities
- Looking Back on 12 Years of Initiatives at the University of Toyama

Accessibility and Communication Support Office, Student Support Center, University of Toyama
Takashi Kusakabe

1．はじめに

平成 28 年 4 月から、障害者差別解消法の施行により、大学においては「障害を理由とする不当な差別的取扱いの禁止」と「障害者への合理的配慮の提供」が義務付けられることになった。令和 3 年の（独）日本学生支援機構の調査によると、大学・短大・高等専門学校（以下、大学等）に在籍する障害のある学生数は約 3.5 万人となり、直近の 5 年間で約 2.4 倍に増加したといわれている[1)]。障害のある学生が入学することによって、アクセシビリティを確保するために大学環境の整備を行い、すべての学生が学びのフィールドにたどり着くための合理的配慮の提供が必要となる[2)]。

さまざまな障害のある学生が入学するに伴い、障害学生を学生が支援する（ピアサポート）する支援学生（以下、ピアサポーター）の積極的な導入が求められている。ピアサポーターの導入に関しては、（独）日本学生支援機構の調査結果によると、「学校が運営する組織に登録する支援学生がいる」と回答した大学等が 202 校であり、支援学生在籍校 228 校の 88.6％となっている。多くの大学等でピアサポーターを確保し、その育成や組織的な運営が必須とされていることがわかる。

富山大学教育・学生支援機構 学生支援センター アクセシビリティ・コミュニケーション支援室（以下、支援室）では、平成 21 年（2009 年）より、障害のある学生を、学生同士の仲間として支え合う活動として、ピアサポート活動を開始した。当初は、ピアサポートが必要な障害学生が少なく、ピアサポーターの人数も少なく、支援技術も充分ではなかったが、近年、聴覚障害学生が継続的に入学するに伴い、ピアサポーターの人的な確保と支援技術の向上が不可欠となった。ピアサポーターが、障害のある学生をサポートするうえで大切なポイントは、①障害理解，②支援技術の向上，③チームの活性化（学生同士の互いの信頼関係）である[3)]。ここでは、過去 12 年間のピアサポート活動を通して、支援学生の意識の深化や技術向上、チームワークの活性化のために、どのような活動や仕組みが必要であったのか明らかにしたい。また、本稿で掲載する活動紹介の写真については、本人達に了承を得ている。

2．活動の概要

ピアサポート活動は大きく（1）ピアサポート活動に対する意識向上の取り組み、（2）障害理解と支援技術向上のための取り組み、（3）チーム活性化のための取り組みにまとめられる。この活動に参加する 2021 年度のピアサポーターの登録数は 87 名であった。

３．活動の実際

（1）ピアサポート活動に対する意識向上への取り組み

①ピアランチミーティング

月に１回（４日間連続:火曜～金曜）のペースで、平日昼休み時間内にピアランチミーティングを開催している。実際のピアサポート活動以外では交流の場を設けることができないため、それぞれの情報共有を行うことを目的に始めた。ピアランチミーティングでは、サポートを受けている障害学生、ピアサポーター、支援室スタッフが昼食を取りながら、日頃の支援活動の様子や今後の支援実施計画についての話し合いを行っている。ここでは、学部や学年、支援を受ける側、支援をする側という関係性にとらわれず、同じ学生として意見を交換し、思いを共有することができる。たとえば、あるピアサポーターからは「何かしなければという気持ちが空回りして、必要以上に手助けしそうになる時がある」といった話があり、それに対して、障害のある学生からは、「障害があるといっても自分でできることは自分でやりたい」という思いを伝えた。土橋（2010）は、支援をする・受ける中で育まれる学生同士の心の学び・成長の場として、人と人を繋ぐことが重要とあげている[4)]。

一方で、ピアランチミーティングは、学生同士が立場や学年を越えて、試験や単位に関する修学面の悩みや、一人暮らしやアルバイトなど、大学生なら誰もが抱える学生生活における悩みを互いに共有する場にもなっている。このような意見交換の場は、お互いの信頼関係の構築にも効果的であったと思われる。

写真１：ピアランチミーティングの様子

②新規ピアサポーター募集のための活動

ピアアポーターは、基本的には毎年前期と後期の新学期にそれぞれ新規募集をしている。活動当初は、支援室スタッフが中心となり、周知活動や実際の募集説明会を行っていたが、数年前からは、①で記述したピアランチミーティング等の場を通じて、ピアサポーターが、新規募集のためのアイディアを出しあい、以下の活動を実施している。

- **周知ポスターやチラシを作成**
- **入学式後にチラシ配布**
- **新入生オリエンテーションでの口頭による説明**
- **新規ピアサポーター募集説明会**

これらの活動を通して、学生による学生自身の工夫や主体的な動きがみられるようになった。同時に、実際に活動を行っているピアサポーターの経験等、「生の声」を発信することで、多くの新規ピアサポーターの獲得にも繋がり、広報としての効果も上がったと確信している。

写真２：
新入生オリエンテーションでの口頭説明の様子

③他大学のピアサポーターとの交流

2016年2月、ピアサポート交流会・意見交換会として本学のピアサポーター11名が、先進的なピアサポート活動を実施している他大学へ訪問した。交流会では、お互いの大学で行っているピアサポート活動の紹介や実際にパソコンノートテイクを通して意見交換を行った。参加した学生からは「タイピングの速度はもちろん、連携テイク技術の高さには驚いた」との感想が多く見られ、他大学の障害学生への理解や高い支援技術を目の当たりにし、強い刺激を持ち帰ることになった。その後、本学に帰ったあと、これまで以上に支援に対するそれぞれの意識やモチベーションが上がり、チームとしても団結を強め、実際のピア活動に良い影響を与え、その意識は現在の現役ピアサポーターにも継承されていると言える。

写真３：
両大学のピアサポート活動紹介・交流と意見交換会

④スタッフジャンパーの作成

支援室では、障害学生支援体制の周知として、ピアサポーターが活動していることを全学的にアピールすることを目的に、スタッフジャンパー（支援室とピアサポーターのロゴ入り）を作成し、活動時に着用している。作製にあたっては、ピアランチミーティングなどで、話し合い、学生主体で進めていった。スタッフジャンパーを作製し、着用したことで、学生からは「今まで以上に責任を持って支援活動に取り組めるようになった」、「チームの一員になれたように思えて嬉しい」と所属感、連帯感の向上に効果があったと考えられる。

写真４：ピアサポーターのスタッフジャンパー

⑤支援室スタッフによる個別の聞き取り

支援室では、ピアサポーターの日々の支援の中で出てくる不安や気づきを支援室スタッフが個別

に聞き取りを行っている。具体的には、実際の支援、たとえば、ノートテイク等の支援が終わったあと、ピアサポーターは支援機器を返却するため支援室へ手続きにくるが、その際、支援室スタッフは、不安や気づきを丁寧に聞き取るとともに、「この調子で大丈夫だよ」、「少しずつ慣れてきたね」などこまめに声掛けを行い、気持ちを労い、安心感を持たせるようにしている。また支援室スタッフだけでなく、一緒に支援に入った先輩のピアサポーターからも、「最初はうまくいかなくても大丈夫、自分もそうだった、一緒にやっていこう」などのプラスの言葉がけをしてもらっている。とにかく、一度支援に入っただけで「うまくできなかった」とあきらめることがないように、お互いに支え合い、フォローしあうことが大切だと考えている。

障害学生支援というこれまでに経験のない活動へ、自ら歩みいることへの不安や無力感は、真摯に取り組む学生にとって起こりがちな心の動きではあるが、このように日々の頑張りを振り返り、承認する場は、ピアサポート活動には欠かせないものだと考えている。

（2）障害理解と支援技術向上のための取り組み

①ピアサポートセミナー（講習会・研修会）

ピアサポートセミナーは、１～２ヶ月に１回程度、さまざまな障害の知識や支援技術を学び、修得できる会として開催している。内容としては、車椅子ユーザー学生の体験談やパソコンノートテイクの実技研修、手話講座、視覚障害について、障害者雇用について等である。

写真５：パソコンノートテイク研修会の様子

また、具体的な支援技術だけでなく、それらをうまく活用するための他者とのコミュニケーションについての研修も行った。参加した学生からは、「体験する事でしか得られない知識や技術を身に着けることができた」、「自分が当たり前にできることでも、障害のある学生にとっては当たり前ではないといったことが分かり、今までとは違った視点から物事を捉えることが出来るようになった」といった声があった。

図１：ピアサポートセミナー等の年間実施計画表（例）

最近では、ピアサポーター主催によるノートテイク研修等も開催され、学生発信・学生主体の活動も増えてきている（図１参照）

また、先輩ピアサポーターが新しいピアサポーターにノートテイク等の支援技術を一から教えることはもちろん、障害理解においても、自らの経験を語り、伝えていくことで、良いロールモデルを身近で感じてもらえる「場」にもなっている。

②アクセシビリティリーダー育成プログラム（Accessibility Leader Program：以下、ALP）導入

本学では、平成23年度からアクセシビリティリーダー育成協議会の会員となり、活動に参加している[5)]。この活動では、教育プログラムを通して、アクセシビリティに関する知識や技術を学び、同時に認定資格（1級･2級）も取得できる。また、1級取得した学生の中から選抜でAccessibility Leader（以下、AL）キャンプに参加することもでき、キャンプを通して、他大学の学生、さらには企業の方々との交流が可能となる。ALPに参加後、ピアサポーターに登録する学生もいれば、ピアサポーターの登録後、ALPに興味をもつ学生もいて、どちらの入口からでも入りやすいよう、2つのチャネルを用意している。

このアクセシビリティリーダー育成プログラムを通じて、障害やアクセシビリティに関する知識を学び、実際の日々のピアサポート活動に活かしている学生も多い。

（3）チームワーク活性化のための取り組み

①活動の「名称化」と「部門化」作り

冒頭でも述べたように、本学では、平成21年（2009年）より、ピアサポート活動を開始したが、当初は、ピアサポートが必要な障害学生（支援対象学生）が少なく、ピアサポーターの人数も支援技術も充分ではなかった。また、支援対象学生が少ない時代には、当然、ピアサポーターの実際の支援も少なく、活動を維持すること自体が難しいという問題があった。これらの問題を解消するために、支援室では、ピアサポーターと支援室スタッフが意見を出し合い、話し合いを重ね、活動を「名称化」し、組織を「部門化」することに至った。

これまでは、活動全般のことを「ピアサポート活動」と表すことが多かったが、言葉文字も長く、どうしても硬い印象もあり、なかなか定着しなかったため、それらを総称して『ピアとみ』と名称化した。“とみ”は富山大学の「富」と英語の「To me（私にとって）」を合わせて、学生主体のピア活動を実現させるという願いをこめて、主体的に意見を述べる際に用いるTo meを採用した（図２参照）。

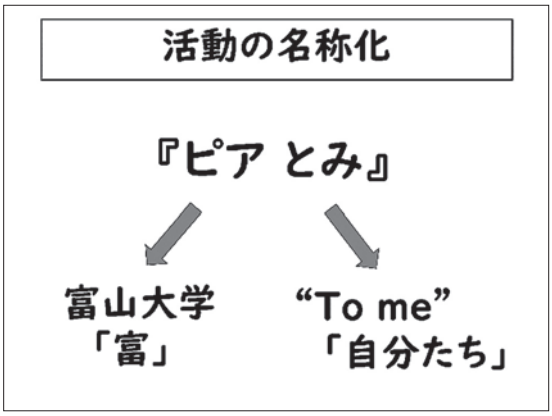

図２：活動の名称化について

次に、ピアサポート活動の中の組織に『部門』を設けた。これらは、あくまで今までの活動に枠組みが加わるという認識で、役割をより明確化するためと、それぞれの部門に「名前」をつけることで、できた枠組みを呼びやすくした。また、ノートテイク等の実際の支援等以外でも活動に参加できるチャンスを部門発信で提供できることも狙いである。具体的な部門分けについては、下記の通りである。

＜ピアとみ Support ＞

PCノートテイクや移動介助など、ピアサポート活動の実支援の軸を担う部門。障害学生とピアサポーターのコミュニケーションをはかるピア日誌の管理と各種支援活動のフィードバックを全体に共有する。

＜ピアとみ情報ナビ＞

ピアサポーターおよび大学内外に情報発信を行う部門。ポスター・チラシの作成、Facebookへのレポート投稿、支援室LINEの運営を主な業務として他部門・支援室と連携しながら情報を円滑にまわす。

＜ピアとみ Learning ＞

ピアサポーター間で「障害など」の知識や技術

を紹介･教育する学習部門。ピアサポートセミナーの企画・開催やALP資格に関する情報提供を主な業務として学生の障害理解を推進する。

＜ピアとみ Cheers!＞

ピアサポーター向けの「ふれあい」部門。新歓やレクリエーションの企画・開催、チームワークの円滑化を目的に主な業務として支援室内に彩りを添える。

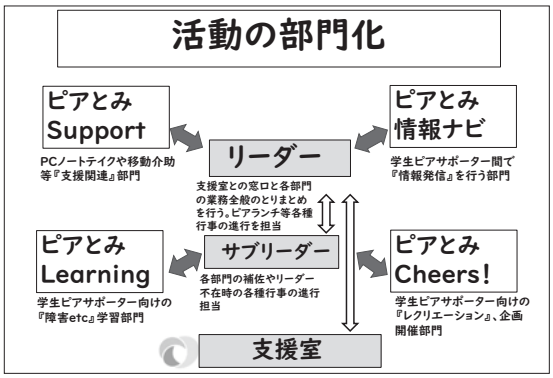

図３：活動の部門化について

これら部門については、基本はそれぞれにわかれていても、ノートテイクなどの実支援活動においては、誰でも参加可能とした。何より、各部門が他部門と連携することでピアサポーター同士が関わりやすい（アクセスしやすい）環境を狙いに掲げた。上記、4つの部門をまとめる役割として、中心にリーダーとサブリーダーをそれぞれ配置した（図３参照）。

②<u>情報交換のための冊子作り</u>

チームワークの活性化のために、名称分けと部門分け以外にも、情報交換やコミュニケーションを活性化させるための工夫として、「ピア日誌」と「ピア文集」を作成した。日々の活動の様子や情報交換については、前述したように「ピアとみ情報ナビ」等で、LINEグループなどを活用しているが、どうしても顔を合わせることがなく、お互いのことをよく知らない関係が続いてしまうことが多い。それらを解消するための方法として、ひとつは「ピア日誌」を作成した。これは、日頃のノートテイク等の実支援に実際に入ったときの様子や感想、引き継いだ方が良いこと、その他、気づいたことなど、さまざまな情報を直接、ノートに記載できる、いわば「交換日記」に近いものである。支援室に準備したピア日記は、障害学生、ピアサポーター、あるいはピアサポートに入っていない学生のそれぞれをつなぎの役目を持ち、お互いの思いや気づきを円滑に共有することを目的とした。このピア日誌は、支援の後に支援室に支援機器の返却をした際に書いてもいいし、空き時間に支援室に来て書いても良いという自由度の高いやりとりができるツールとして位置付けた。このピア日誌を設置した当初は、日誌という媒体を挟むことで直接のコミュニケーションが減るのではないかと心配したが、むしろ、ピア日誌に書かれた内容がきっかけに学生同士の直接的なコミュニケーションも増えたと実感している。

もうひとつは、「ピア文集」の作成である。作成のきっかけは、4年間、ピアサポーターとして活動を続けてきた学生に何か形に残るものを作りたいと発案したことが始まりである。ピアサポート活動では、毎年、卒業時に「4年生を送る会」という会を開催しているが、そこで、作成した「ピア文集」を在校生から卒業生に記念品として贈っている。内容としては、各メンバーのプロフィールや、これまでの活動写真等が掲載され、お互いを知ることはもちろん、卒業生から在校生に向けたメッセージ等を含め、ピアサポート活動そのものを引き継ぐ媒体にもなっている。

写真６：ピア文集

4．まとめと今後の課題

本学のピアサポーターの多くは、学部の専門性や単位取得等の直接的なメリットにとらわれず、さまざまな学部の学生が活動に参加している。学生同士の垣根を超えたアクセシビリティであり、多様性を尊重する場なのではないかと考える。この活動は、部活でもサークルでもない。特異性を持った活動として位置付けられるため、多くの学生は、ピアサポート活動から自分の大学生活に何か価値を見出したいと考えていたり、自分自身の「居場所」としてこの活動に参加したりしている。

一方で、「障害学生の支援」を考えたときに、支援活動に参加する人は、「障害のある方のために何かやらなければいけないのではないか」、「何か高い志がないとダメではないか」という思いが先行する傾向がある。また、土橋（2010）は、「求めているスキル（タイピング等）が高いことから、自信がないと活動に踏み込めないことが多々ある」と、活動参加への敷居が上がる要因を紹介している[4)]。そういった壁を取り除くために、本学では、まずは「ピアランチミーティング」に参加してもらい、その中でお互いの関係性を創っていく機会を設けている。学生同士の関係性やお互いの理解の深めることに充分に時間をかけた上で、実際の支援に係わっていくという流れは、本学の特色のひとつと言えるだろう。ある障害学生からは「ピアランチミーティングの場は自分にとって大事な場所。今後は支援を受けるだけでなく、自分にできることがあれば、支援をする側も経験したい」という声があった。実際、近年では聴覚障害のある学生を講師として、ピアサポートセミナーで「手話講座」を実施している。

このように障害の有無にかかわらず、仲間として助け合うことはもちろん、仲間として活動することによって、お互いの大学生活が充実し、活性化されることに、ピアサポート活動の大きな意義があるといえるのではないだろうか。

今後の課題を挙げておきたい。一つは、ピアサポート活動に関わる継続的な「人」の確保である。これは、長年の課題であり、その対策として、新入生オリエンテーション時の口頭説明や対面・オンラインと新規ピアサポーター募集会を実施し、それら活動の様子をSNS等で発信している。人数が確保でき、登録学生が増えたとしても、実践に参加できるコアな学生に成長してもらうまでに時間がかかることも難しさの要因だと考える。

もうひとつは、遠隔情報保障（聴覚障害学生が授業を受講する現場から離れた場所で支援を行うこと）を含めたパソコンノートテイク等の支援スキルの質の向上があげられる。特に情報保障においては、日々の技術革新が急速に進み、常に新しい支援技術を取り入れていく必要がある。また、ノートテイクの場合、技術的な不安が、学生の参加に対する敷居が高くなる要因にもなる。ところが、聴覚障害学生からは「高校時代にパソコンノートテイク等の情報保障は受けてきていないので、ちょっとした情報保障でも大変助かります。ただ、まだまだノートテイクを受けること自体にも慣れていないので、ノートテイカーの皆さんと一緒に頑張りたいです」といった声もある。

大学に入学して初めて経験する「障害学生支援」、「ピアサポート活動」を通して、支援をする側も受ける側もお互いに初めての体験である、活動を共にしている。ピアサポート活動を通してお互いを高めていくこと、お互いが成長していくのだということを、体験を通して実感してほしいと思う。

今回、ピアサポート活動を活性化するために組織を「部門化」したことは、それぞれの役割を明確にし、学生の意識やチームワーク向上につながったといえる。これらの組織体制をさらにブラッシュアップし、継続的に運営していくことが「人」の確保や支援の「質」の向上にもつながるのではないかと考える。

利益相反

本論文の内容に関して開示すべき利益相反はない。

＜文献＞

1)令和２年度（2020 年度）大学、短期大学及び高等専門学校における 障害のある学生の修学支援に関する実態調査結果報告書，50
2)西村優紀美，(2021)「発達障害のある生徒・学生へのコミュニケーション支援の実際」，『金子書房』，5-10
3)日下部貴史，西村優紀美，桶谷文哲，田中裕子，荻生千愛 (2016)「富山大学におけるピアサポート活動の現状と課題」，『全国高等教育障害学生支援協議会（AHEAD JAPAN2016）第2回大会論文集』，103-104
4)土橋恵美子（2010)「高等教育機関における障がい学生支援の場に関する一考察－同志社大学障がい学生支援コーディネーターの立場から」，『同志社大学同志社政策科学研究』，71-89
5)アクセシビリティリーダー育成協議会HPサイト.https://al-pc.jp/web/